

三遊亭らん丈 後援会会報

『平和学事始』

三遊亭らん丈

らん丈ひとり会『どうしまシヨウ』での今回のテーマは「平和学事始」です。

時あたかもご存知の通り、「有事法制 関連三法案」が衆参両院の可決をもって成立しました。この場合の有事とは、言うまでもなく戦争です。

ですから、「戦争関連三法案」とした方がわかりやすいのに、そうはしないのですね日本政府というものは。

行政を与えるものとしては、いっどこからどの国が攻撃してくるか分らないけれど、日本が攻め入れられたときに、超法規で対処するのでは、あまりに心許ないから、同法案を成立させた、という理屈を押し立てます。これは、分からないではないですね。ただ、それに当たっては

一年という期限を切った、国民保護法制をしつかりと整備してもらわなければ困りますが。

それに対して、たしかに北朝鮮の脅威はあるものの、果たして日本がどの国の攻撃を受けるといいのか、ほとんど現実には有り得ない事態を想定した法案をなぜ、今頃成立させなければいけないのか。そもそも、この法案を成立させた真の目的は、「対米協力」ではないのか、という反対意見も傾聴すべきですが、「選良」からなる国会は、圧倒的多数をもってこの法案を成立させたのです。

それに対する多くの反対意見は、メルマガジン「真面目な落語家、三遊亭らん丈の不真面目日記」二〇〇三年六月十

二日号に記したので、ご興味のある方は、らん丈ホームページからそちらをごらんくださいますように。

ただ、くれぐれもお間違えのないようにしていただきたいのが、今回のテーマは「平和学」事始であって、「戦争学」ではないということです。たしかに平和と戦争は対立する概念ですが、非戦争状態が平和と同等のものではない、というのが「平和学」の立場です。

今回のゲストのひとり、横山正樹先生は、フェリス女学院大学国際交流学部教授を勤めながら、立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻において、国際協力論の講師も担っており、また、日本平和学会の理事でもあり、まだ呱呱の声をあげて間のない平和学という学問を日本に根付かせた、そのお一人でもあります。

ご縁は、らん丈の立教大学経済学部

2003年6月25日発行
第19号 頒価100円
三遊亭らん丈後援会
【URL】<http://www.ranjo.jp/>
E-mail:machida@ranjo.jp
TEL 042(732)2004
FAX 042(732)2005

先輩と言うよりは、昨年度らん丈が受講した、まちだ市民大学HATSでの「平和学講座—今、私たちが考えること・できること—」で講師を勤められた横山先生と、面識を得たことによりです。

その講座で先生が強調していたのが、平和学にとっては画期的な著書『構造的暴力と平和』の著者ヨハン・ガルトウングの「平和とは、暴力の不在である」という有名な言葉でした。

なるほど、いかにも学者らしい言葉ですね。たしかに現実には、暴力が満ち満ちています。それは構造的暴力という概念を導入することによって、社会構造に組み込まれた暴力であることに、気づかされるのです。たとえば、ぼくが以前自動車に轢かれたことよって負った骨折も、近代文明に組み込まれた一種の構造的暴力でしょう。

あるいは、先生のご専門の開発主義との関連でいえば、ゴミ問題も平和学にとっては、欠かせない視点です。ゴミと化した中古車のリサイクルを、人件費の安い東南アジアに輸出することで解決しようとする人がいますが、彼らは、日本での環境基準値を大幅に上回る排気ガ

スを撒き散らすクルマを輸入したアジア諸都市での大気汚染には、無頓着を決め込みます。

ことほどさように、構造的暴力は、社会構造に組み込まれているがために、解決どころか、問題の顕現化すら覚束ないことが、間々あるのです。

いくら社会の凶器として年間八千人の人命をこの日本から奪うからといって、

『町田市民の勉学パワー』 三遊亭らん丈

国際経営開発研究所（IMD）の『世界競争力年鑑二〇〇一』によると、「自国の大学教育が十分に競争できる人材を供給しているか」との設問に対し、日本の経営者の回答は調査対象四十九カ国中、最下位を示したそうです。

ぼくはこの回答の数字を、素直に受け取ることは出来ません。というのも、大学教育とは、そこからどれだけのものを与えられるかではなく、どれほどのものを学生が獲得しようとするかで、その教育は機能する、と信じているからです。

つまり、どんな名伯楽であろうとも、馬を水辺に連れて行くことはできても、水を

まさか自動車を一掃しようと言う人はいないように、社会構造に取り込まれた構造的暴力とわれわれ市民との対峙は、近代市民社会が抱え込んだ宿痾と呼ぶべきものなのかもしれません。

近代の超克という言葉が一時はやりましたが、そのためには「平和学」の視点は不可欠であるとともに、とても有効である、と、らん丈は考えるようになったのです。

飲ませることはできないように、いくら素晴らしい教育環境を大学が整えても、それを学生が利用しなければ、宝の持ち腐れとなってしまうのですから、大学教育の評価は学生の勉学意欲に、大いに左右されるものです。

その勉学意欲だけを比較すれば、ぼくが最初の学生時代を過ごした一九八〇年前後より、いまの学生の方が、就職難という誘因があるためか、はるかに旺盛です。したがって勉学に費やす時間は今の学生の方が断然多いでしょうし、英語とパソコンを駆使できる学生にいたっては、雲泥の差です。尤もあの頃のパソコンと今の

それとでは、まるで異なるものとなつてはいますが。また、大学の科目としてインターンシップ（学外特別研修）が導入されたことなどにより、いまの学生の方がはるかにビジネス感覚には長じています。

ただ困ったことに、学生は実業界の要請に応えられる人材であればそれで好いのかというと、これが教育の難しいところなのですが、必ずしも良いことばかりではないのです。

学科の勉強はよくできるものの、それ以外の、教養＝リベラルアーツを身につけるための「勉強」は、圧倒的に今の学生には不足しています。その当時、一九七〇年代の文学部の教授は、講義に毎回出てくる学生は「バカだ」と言つて嘆いたものです。そんなヒマがあったら、本を読み、映画、芝居を観、音楽を聴き、女の尻を追っかけていろとけしかけたものです。

今どき教授がそんなことを言つて御覧なさい。学生のお母様が柳眉を逆立てて、発言した教授の研究室に怒鳴り込んでくるのではないかしら。

たとえば英国においては、ミルトンの詩を口ずさみ、シェークスピアの台詞を諳んじつつ、ベートーベンの音楽をその背景と

なつたフランス革命との連関において論じ、読むのはラテン語というのが、ごく普通の教養人のありかたでしょうか。

ふりかえつて今日の日本では、英国とは違つて教養人を生み出す重要な要素である階級差が、顕在化していない社会（もちろんぼくはそれを肯定的に捉えています）というハンディキャップがあるとはいえ、その教育によつて、さてどんな教養人が生み出されるのでしょうか。まして、文部省（当時）は「平成の大学改革」と称せられる、一九九一年の大学設置基準の大綱化（基準緩和）により、教養教育をなし崩し的に解体させ、代わりに専門教育を充実させました。その結果、大学によつては第二外国語を学ぶことなく、あるいは人類の叡智である古典哲学には一切触れることなく、学生は大学を卒業できるようにになりました。

ここからがいよいよ本題です。ぼくは、経済学部を卒業した昨年度から、まちだ市民大学を受講しました。そこでは様々な講座が開講されているのですが、ぼくは前後期ともに「国際学」を受講し、藤原帰一（東大教授）、内藤正典（一橋大教授）、中村廣治郎（桜美林大教授）、片倉

もとこ（中大教授）、葉祥明（絵本作家）といった、錚々たる講師による講義を聴講することができたのです。

そして、それ以上にぼくにとつて有意義だったのはその講座で、様々な町田市民の方々とお知り合いになれたことです。研究発表に向けての自主学習や、レポート集発行のための編集会議、あるいは講座修了生有志による平和学研究会での討議を通して、受講している市民と、その年の三月まで在籍していた大学の学生との、あまりに大きな違いを、膚で感じる事が出来たのです。

そこでは皆、じつに生き生きと勉学していたのでした。今の学生たちの勉強は、ぼくに言わせれば「ためにする」ものであつて、本来の楽しかるべき勉学とは似ても似つかぬものに思えてならなかつたのです。つまり、そこで行われている勉学とは「A」欲しさの勉強であり、ニーチェに『心たのしい学問』という著作があります。それとは正反対のまるで楽しくはない（と思われる）勉学です。

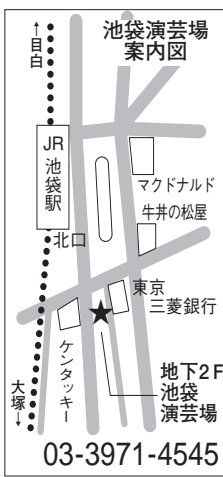
そこへいくと、まちだ市民大学で行われている勉学とは、自律であるがゆえの『心たのしい学問』です。

そこで驚かされたのが、町田市民のあまりに高い知的ポテンシャルでした。そんな方々と一緒にできる市民大学ですから、当然のことですが、今年度も受講しました。仕事で行けないときは泣く泣く欠席しますが、極力出席するようにしています。そして、いつの間にやら講義の日を心待ちにしている自分に気づくのです。能動的な勉強以上に楽しいものは、ぼくは今のところほかに見出すことができないのです。

「どうしまシヨウ」
七月二十六日(土)午後六時半 開演
池袋演芸場 (左図参照)にて前売：千八百円

イラクでの戦争は終熄したようですが、大量破壊兵器(WMD)は見つかる気配がなく、大義なき戦争を起こした責任を、米英両国はともにとつていただかないと、イラク国民はどうして殺されなければならなかったのか、合理的な説明がつきません。

今回のゲストは四人の方々です。お一人はフェリス女学院大学国際交流学部教授の



「横山正樹先生」です。横山先生は、立教大学理学部物理学科在学中に、日本とアジア諸国との関係に疑問を抱き、同学部卒業後、経済学部部に編入学し、その後、経済学研究科博士課程を修了し、平和学の視点で東南アジア諸国と日本との関係を考究されています。また、横山先生の研究室で学んでいる、平井朗さん、伊藤美幸さんのお二人の院生(フェリス女学院大学大学院国際交流研究科博士後期課程)も一緒に参加してください。

もうお一人は、立教大学経済学部助教アンドリユー・デウィット先生です。デウィット先生はカナダ出身の政治学博士として、財政学を担当しています。また、「世界(岩波書店)では、金子勝(慶大教授)とブッシュ政権がいかに危険であるかの論考を連載しています。それがまとまったものとして、『反ブッシュイズム』『終わらない戦争』(岩波ブックレット)の二冊を上梓していますので、ご興味のある方は是非ごらんください。

「5ん丈ホームページのお知らせ」
落語会のお知らせや趣味の俳句、大学の授業で発表したレポート、某誌に連載中のエッセイ等を掲載しておりますので、どうぞアクセスしてください。メールマガジンの配信もしていますので、是非ご登録下さい。
<http://www.ranjo.jp/>

一次回の「どうしまシヨウ」は10月30日を予定しております

「三遊亭らん丈」後援会入会要項

入会金(会員証作製費+郵送料)として入会者全員から二千円申し受けます。

年会費は四千円ですが、池袋演芸場で行う『どうしまシヨウ』の入場券(二千円相当)を年間で二枚(四千円相当)差し上げます。

◎入会金二千円+年会費三年分一万二千元→一万八〇〇円、合計二、八〇〇円

年会費を三年分前納して下さった方には、10%割引させていただきます。

◎入会金二千円+年会費二年分八千円→七、六〇〇円、合計九、六〇〇円

年会費を二年分前納して下さった方には、5%割引させていただきます。

◎入会金二千円+年会費一年分四千円、合計六、〇〇〇円

会員証と後援会会報のみ御送りします。

※振込先口座※

郵便振替口座00100011730458

加入者名・三遊亭らん丈後援会

《東京三菱銀行・町田支店》

普通預金・1897690 三遊亭らん丈

《みずほ銀行・町田支店》

普通預金・8046459 三遊亭らん丈

《三井住友銀行・町田支店》

貯蓄預金・7264788 三遊亭らん丈

《UFJ銀行・町田支店》

貯蓄預金・1096152 三遊亭らん丈

《りそな銀行・町田支店》

普通預金・1093822 三遊亭らん丈

《イーバンク銀行》<http://www.ebank.co.jp/>
支店番号209・口座番号1393592